

琴平町における米麦種子の安定生産に向けた取り組み

■ 琴平町米麦種子生産者 ■

(中讃農業改良普及センター 松家輝、藤井貞吉、間島正博、濱口恵、池内洋
○香西俊哉、池田晃一郎、中山綾乃、西川辰洋)

●対象の概要

中讃地域は、水稻及び麦類の種子生産が盛んな地域である。中でも、琴平町は県内で有数の種子生産地域であり、琴平種子生産者組合によって、水稻及び麦類の採種ほが設置されている。水稻では県オリジナル品種「おいでまい」(R 5 産 8.8ha)、麦類では県オリジナル小麦品種「さぬきの夢2009」(R 5 産 11ha)の種子生産に取り組んでいる。

●課題を取り上げた理由

近年、「おいでまい」種子の歩留まり(収穫重量に対する選別後の籾重量の割合)の低下が問題となっている。これは夏季の異常高温等の気候変動や施肥条件、「おいでまい」の分げつが旺盛な特性等によって、過剰に分げつして籾数が過多になったことなど複数の要因が考えられる。歩留まりの低下は種子生産者の収益に影響を与え、栽培意欲の低下に繋がる。そのため、種子用籾の歩留まりの向上を図ることで、「おいでまい」種子の品質・収量の向上を目指すこととした。

また、「さぬきの夢2009」は、後継品種である「さぬきの夢2023」への品種転換を予定しており、令和9年産一般栽培で全面的に切り替える計画である。琴平地区では、県内での栽培に先駆けて種子の増殖が行われており、今後の新品種の種子生産と一般栽培の普及に向けて、栽培体系の確立が急務となっている。

●普及活動の経過

1 「おいでまい」種子の品質向上に向けた取り組み

1) 採種ほの審査・現地指導

良質種子の生産に向けて、「おいでまい」の種子を生産する採種ほの状況確認を県種子協会と行った。また、各生育時期にあわせて栽培に関す

るよう、中干しの実施や追肥時期に関する栽培管理指導を行った。

2) 種子品質向上に向けた施肥体系の検討

籾数を適正にし、種子の歩留まりの向上を図るため、展示ほを設け、施肥体系の見直しについて検討した。「おいでまい」の旺盛な分げつを抑えるため、基肥量を慣行量、1/2量、無施肥の3区を設定し、基肥の量が収量・歩留まりに及ぼす影響を確認した。

2 「さぬきの夢2023」への品種転換に向けての取り組み

1) 「さぬきの夢2023」の生産現場への普及に向けた取り組み

県内で先行して種子生産を行っていることから、専門指導員や農業試験場と連携して現行品種「さぬきの夢2009」との品種上の特性の違いや栽培面での注意点を確認しつつ、栽培管理指導を実施している。

葉色等の生育状況の把握や麦踏み等の管理作業に関する情報を集め、追肥時期の判断や「さぬきの夢2009」の栽培管理との比較検討を行っており、令和5年播きでは、気象状況等から播種時期を例年よりも2週間程度遅らせるよう指導した。

また、県内各地の種子産地への技術普及を目的に、他地域の種子生産者も交えた視察講習会を県種子協会と共同で実施し、円滑に品種切り替えが出来るよう取り組んでいる。



視察講習会の様子

2) 「さぬきの夢2023」の栽培体系の検討

「さぬきの夢2023」への切り替えに向けて、種子生産と一般栽培双方の栽培体系に対応する施肥基準を検討するため、従来の「さぬきの夢2009」の栽培体系と比較する展示ほを設置し、栽培状況を確認することとした。（表－1）

表－1 展示ほ各区の施肥体系 (kg/10a)

	基肥	追肥	追肥
慣行区	35 (12/4)	20 (1/23)	25 (2/29)
展示区1	35 (12/4)	20 (2/17)	25 (3月中)
展示区2	35 (12/4)	30 (2/17)	15 (3月中)

（慣行区は「さぬきの夢2009」栽培しおりの内容に準拠。肥料は各区とも基肥は「硫加磷安402」、追肥は「朝日BB488」）

●普及活動の成果

1 「おいでまい」種子の品質向上に向けた取り組み

1) 「おいでまい」種子の歩留まり向上

基肥の減肥や葉色に応じた追肥、中干しの実施を指導した結果、琴平町産「おいでまい」種子の生産実績は、令和4年産では44.7%だった歩留まりが令和5年産では77.2%に改善された。（表－2）

生産者も結果には非常に満足しており、来年度以降の「おいでまい」種子の生産の意欲向上に繋げることができた。

表－2 おいでまい種子生産実績

年産	乾燥後 籾収量 (kg/10a)	製品 籾収量※ (kg/10a)	歩留まり (%)
令和5年	720	556	77.2
令和4年	751	336	44.7

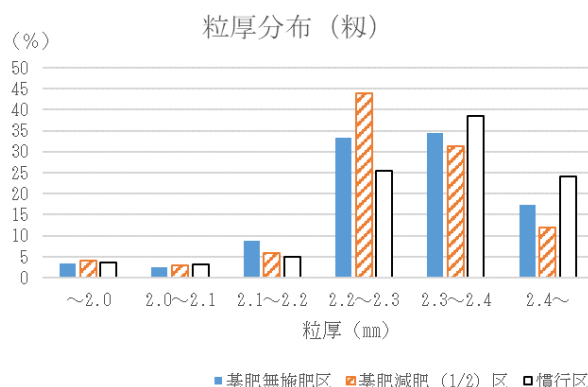
※選別後（篩目2.2mm）

2) 施肥体系の検討に関する取り組み

展示ほでの結果は、 m^2 あたり籾数及び粒厚分布の傾向は3区とも近い数値となった。基肥の量を制限することで分げつを抑制する一方、基肥が慣行より少ない場合でも穂肥を適切に行うことで適正籾数を確保できる可能性（表－3、図－3）が示され、生産者に指導してきた基肥量の見直しや追肥時期の検討といった栽培管理の見直しを裏付ける結果が得られた。

表－3 展示ほにおける m^2 あたり穂数、
籾数、有効茎歩合

	m^2 あたり 穂数 (本)	m^2 あたり 籾数 (粒)	有効 茎歩合 (%)
慣行区	382	32,899	85.6
基肥減肥 (1/2) 区	369	31,346	64.0
基肥 無施肥区	404	32,202	60.2



図－2 展示ほにおける籾の粒厚分布

2 「さぬきの夢2023」への品種転換に向けての取り組み

11月27日から12月4日にかけて46筆の採種ほ場に播種された「さぬきの夢2023」は出芽良好で、定期的な踏圧や葉色推移にあわせた追肥等の指導に基づく生産者のきめ細やかな栽培管理により、順調に生育している。

現地視察講習会の実施を通じて種子生産者の不安や疑問点など活発な意見交換を行い、品種転換に向けての情報共有と不安解消に繋げることができた。

●今後の普及活動の課題

1 種子歩留まり向上に向けた栽培体系の普及
穂肥診断や中干し現地講習会を開催し、施肥管理や水管理など基本技術の定着化を図る。

2 「さぬきの夢2023」の栽培体系の検討及び普及

品種転換が進められていくことから、「さぬきの夢2023」の種子生産・一般栽培に向けての栽培技術確立するとともに産地への普及を目指す。